〔PBLの風と土　第10回〕

穴を埋めるのではなく良い点を伸ばして

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学で学外研究の機会を得ました。オールボー大学では1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見（5回目：オールボー大学の実践の特徴、6回目：学習プロセス、7回目：問題設定、8回目：指導法）を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねています。

1. 米国からゲストを招いての探究の場

前回の連載（第9回）でも紹介したとおり、7月27日から28日にかけて、ミネソタ大学のアンドリュー・フルコ（Andrew Furco）先生を立命館大学大阪いばらきキャンパスにお招きし、サービス・ラーニングに関する国際会議を開催した。[1] 2017年2月、これも前回取り上げたインディアナ大学-パデュー大学インディアナ校のサービスラーニングセンター長を務めたロバート・ブリングル（Robert Bringle）先生を招いた公開研究会を行ったが、それとは規模も枠組みも大きく広げることになった。[2] 何より、今回のシンポジウムは第4回日本サービス・ラーニング・ネットワーク全国フォーラムの全体会として位置づけられた。その上で、筆者らが代表者となっている共同研究（JSPS科研費18K02742）にも関連づけ、同時通訳を起用しての開催とした。

2日間にわたる国際会議の主催者である、日本サービス・ラーニング・ネットワーク（Japan Service Learning Network）は、サービス・ラーニングという教授法に基づいた教育プログラムに関わる人々のネットワーキングのために、2015年に設立された会である。学会と銘打っていない上、日本学術会議の協力学術研究団体に指定されてもいない。ちなみに、米国では1985年に、学長を代表者とするサービス・ラーニング推進機関として、キャンパスコンパクト（Campus Compact）が設置され、理論的知識を実体験によって補完する教育を推進する協会として現在も活動を続けているが、そうした連合組織という性格を追求しているわけでもない。[3] JSLNは会員制の組織として、サービス・ラーニングを導入している大学の担い手らを中心に、日本で唯一のサービス・ラーニングに関する研究・実践・交流団体として、年次大会の他、英語文献の翻訳、実態調査、評価方法の研究などに取り組んでいる。

今回で4回目となる年次大会は、明治学院大学、日本福祉大学、高知大学とリレーされてきた。前回も1998年度に文部省（当時）の高等教育局が「学生のボランティア活動の推進に関する調査研究協力者会議」を組織し、1999年3月には「大学教育におけるボランティア活動の推進について」をまとめたことに触れた。そのまとめの中で、日本ではサービス・ラーニングを「社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加することを通じて、体験的に学習するとともに、社会に対する責任感等を養う教育方法」と定義され、後の答申等の用語集でも、この表現が用いられている。こうして高等教育政策で着目されて20年余りが経過しているものの、サービス・ラーニングという概念や実践は、アクティブ・ラーニングの隆盛とあわせて、その意義などに注目が集まる一方で、哲学的、理論的、また方法論的側面についての実践的研究は、それほど広がっていない。[4]

そこで今回、特別ゲストとしてフルコ先生を招き、国際サービスラーニング・地域貢献学会（IARSLCE）をはじめとして国際的に活躍され

てきた先生の知見にあずかることで、改めてサービス・ラーニングを組織的に展開する上で、その担い手に求められる知識・能力・態度について深めることとした。2日にわたる大会のテーマは「サービス・ラーニングが拓く未来：貢献の時代から連携と倫理の時代に」（A Future of Service-Learning in Japan: Transition from Community Contribution to Collaborative Practice and Ethical Communication）と据えた。これは担い手による「貢献」のあり方だけでなく、多様な主体と関わり合う上で求められる行動規範など「連携と倫理」についても深めていく場としたい、という企図からである。本連載は「PBLの風と土」ではあるものの、前回も確認したとおり、教育実践の関連性を鑑み、今回から3回にわたって、フルコ先生を迎えて展望した日本の地域参加型学習の未来について紹介していくこととしよう。

2. 関係づくりが質の高い学びへ導く

フルコ先生の基調講演は、ご自身による日本語での挨拶で始まった。全体会の直前、トークセッションとの打合せを終えた控室にて、「Google翻訳で訳してきたんだけど、これで大丈夫か確認して欲しい」と投げかけられ、ゲストの一人である北出慶子先生（立命館大学文学部教授）らと共に、細かな表現を修正させていただいただいたものを、演題にて読み上げられたのである。

> こんにちは、よろしくお願いいたします。今日、立命館大学にご招待をいただき、非常に光栄に存じます。私の日本語は皆さんにご理解いただけますか？しかし、私の能力は非常に限られていることをお詫び申しあげます。ですので、発表は日本語でさせていただきます。ご理解いただき、ありがとうございます。[5]

参加者の皆さんから寄せられた「おお！」という声と拍手に、ふと、筆者が幼少の頃、大相撲の本場所の千秋楽にて、「ヒョー・ショー・ジョウ！」と読み上げて「パンアメリカン航空賞」が贈呈されていたことを想い起こした。同時に、フルコ先生のお人柄が一瞬にして参加者に伝わったのではないかと確信できた場面であった。

フルコ先生の34枚にわたる基調講演「互恵的

写真1：日本語で冒頭挨拶したフルコ先生（筆者撮影）

かつ倫理的な地域コミュニティとの関係構築～バランスのとれた体験学習としてのサービス・ラーニング（Building Reciprocal and Ethical Community Partnerships: Service-Learning as a Balanced Approach to Experiential Education）」のスライドは、予め日本語に訳した上で参加者に提供され、当日の配布資料にはスライドで8枚分の文献情報も加えられた。ただ、タイトルのスライドと2枚目のスライドに移るまで、10分ほどかけて、JSLNの市川享子代表と、立命館大学サービスラーニングセンターの杉本通百則センター長の挨拶に対し、基調講演との関連づけが図られた。特に、市川代表と杉本センター長の双方に共通していたのは、人口減少社会を迎えた日本では、18歳選挙権の導入や地域再生など国内事情だけでなく、グローバル化への対応のもとでのアクティブ・ラーニングの重視など、高等教育機関への社会的な要請の高度化の中で、ますますサービス・ラーニングが重要になっている、という認識であった。そこでフルコ先生は、冒頭でサービス・ラーニングへの着目は世界中で見られる傾向であることに触れ、(1)ICTの台頭により若者たちが教室以外で多様に知識を得る手段を持つ時代になり学校や学業に対する態度が変わってきたこと、(2)何十年にわたり初等・中等・高等教育の制度は改革を重ねながらも根本的には変わっていないために教育者による学習者への外的な動機付け（例として、課題に成績をつけて学習者らの

お尻を叩く、など）の力量に依存せず学習者らの内発的な動機付けで学びと成長への興味を喚起する必要がある、と示した。加えて、民主主義的な社会を維持するには市民性教育（citizenship education）を欠かすことができず、若者が政治的活動に参加しなかった帰結が現在の米国の行政システムに現れている、と指摘した。[6]

フルコ先生は、学習者が物事に対して新鮮さや感動を抱くようにする、内発的な動機付けの活性化を図る教授法の一つがサービス・ラーニングとして位置づけているという。この点は、かつてレイチェル・カーソンが示した「センス・オブ・ワンダー」や、昨今の教育学で議論されているパラダイム転換（例えば、溝上，2014）にも通じる点であろう。実際、溝上（2014）では「教授パラダイムは、『教員から学生へ』『知識は教員から伝達されるもの』を特徴とするのに対して、学習パラダイムは、『学習は学生中心』『学習を産み出すこと』『知識は、構成され、創造され、獲得されるもの』を特徴とするものである」（p.34）と整理されたが、その後、河井・溝上（2016）はさらに「学習とそれによって生みだされるバリエーション豊かな成長・学習成果が問われる」という特徴を持つ「学びと成長パラダイム」への転換の必要性・妥当性を指摘している（河井・溝上，2016，p.41）。ただし、そうした、学生の学びと成長をもたらす教授法の一つがサービス・ラーニングであるものの、フルコ先生は全てのサービス・ラーニングが学習者のため、また地域のためになるわけではないことについても注意を喚起しており、「私が今日一番申し上げたいのは」と前置きの上で「質の高いサービス・ラーニングを教育システムに組み込むには、まず地域連携が倫理的・協働的・互恵的なパートナーシップのもとで展開されることを、それぞれに確認しなければならない」と語り、用意されたスライドを用いての講演に入った。[7]

3. 穴を埋めるではなく共に創る姿勢へ

基調講演では、用意されたスライドをもとに、各種文献の出版と学協会の活動から世界各国でのサービス・ラーニングの機運の高まりに触れた上で、理論的観点の紹介に続き、各種事例をもとにした大学と地域のパートナーシップのあり方についての論点整理、そして各種研究成果から学生へのインパクトについて述べられた。同時通訳を入れていたことも奏功して、参加者との質疑応答も頻繁になされたため、地域とのパートナーシップをいかに構築するかについて触れる時間がなくなってしまった。そのため、後段のトークセッションでは筆者がコーディネーターを担うという役割に乗じて、立命館大学関係者による3名のリレートークの後、小休憩を挟んでの市川JSLN代表のコメントの後、語っていただくことにした。当該部分のスライドは7枚にわたっており、創始・維持・展開・解消の4つの段階による構造的な整理がなされていた上、他ならぬ筆者が最も関心のある話題であったため、何とか触れていただきたいという願いで進行の工夫をしたのであった。

サービス・ラーニングに関する理論的観点については、本連載でも紹介しているものも含め、日本でも基本的な考えについて紹介されてきた。特にJacoby（1996=2007）による「互恵」と「省察」が鍵概念となることは、日本の大学での教育実践に深く根ざしている。また、立命館大学ではBringleら（2009）のSOFARモデルを、受入団体等との関係性の見直しに活用してきている。何より、前回の連載で強調したとおり、Furco（1996）による社会での活動を伴う学習プログラムの相互比較では、サービス・ラーニングが「する／される」そして「自己の学びと成長／現場への貢献」の２つの軸において共に中道を行くものとして、プログラムの構想・設計のみならず評価の観点としても用いることができる。

今回のフルコ先生による基調講演では、理論的観点に関する議論の手がかりとして、OECDの調査結果を踏まえたものとして、図1のとおり、学びへの根源的な動機づけを促すために効果的な教育法として7つの特徴を紹介した。口話では、まず左端の「Authentic」が最も重要とした上で、続いて右端の「Active」、そして「Constructivist」と「Collaborative」、さらに「Personalized」と「Empowering」、最後に「Expands Boundaries」の順で、7つの

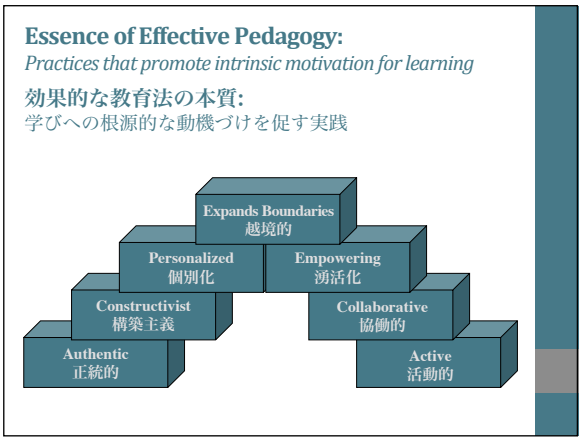

図1：基調講演スライドより（4枚目、訳は筆者）

要素が紹介された。7つめの要素が4段目にあり、かつ1段目から3段目までの要素間の距離から、全体を山の形に見立ててみれば、正面に対して左側が伝統的かつ個人的なアプローチ、右が創造的かつ集団的なアプローチと、対比の上で整理しつつ、少なくとも教育者と学習者のあいで「させる—させられる」という構図を脱却できるかを考える7つの柱として捉えることができるだろう。フルコ先生によれば、数ある体験学習法の中でも、サービス・ラーニングこそが、これら7つの要素が全て含まれた方法だという。[8]

そこで、改めてサービス・ラーニングは中道を歩むものであるということ、すなわちバランスの取れた教育実践であり、学びのコミュニティの創出・維持・発展が不可欠であり、さらには学生の内発的な動機付けがなされた学びと成長がもたらされる必要がある、という点が重要になってくる。今回、前回紹介したFurco（1996）の図解に加え、図2による解説が示された。これは本連載では第4回で紹介したSigmon（1994）によるサービス・ラーニング

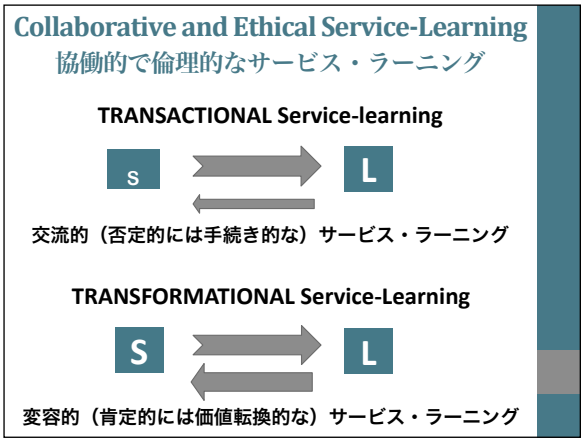

図2：基調講演スライドより（8枚目、訳は筆者）

分類も参考にし、サービスとラーニングの両者のバランスについて、相対的に充実している方を大文字にして相対的に充実していない方を小文字にする、さらにサービスとラーニングの両者の往還度合いを矢印の太さ・細さで表現するという図解として捉えられる。この解釈を前提にしたとき、この図解が示唆するものは、サービス・ラーニングにおいて、活動がおざなりになる場合、あるいは活動が学生の学びと成長に恩恵があったとしても学習成果が現場に還元されない場合は、大学側の事情によって地域との連携・協力・交流がなされたとはいえ、大学側の事情で構想・設計・企画・実施されたプログラムが一定の事務的・教育的な手続きによって履行されたに留まる、ということである。よって、前掲のJacoby（1996=2007）が整理した鍵概念にもあるように、互恵的な関係のもとでのサービス・ラーニングがなされれば、地域課題に対して問題解決の実践が図られつつ学生の学びと成長がもたらされるという点で変容的であり、大学と現場とのあいだで協働的で倫理的なサービス・ラーニングとなり、結果として既存の価値観に囚われることもないという点で価値転換的な質の高い教育実践が展開されることとなろう。

4. 穴を埋めるではなく共に創る姿勢へ

以上、今回は今後3回にわたって2019年7月27日に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された国際会議の内容を紹介する1回目として、サービス・ラーニングが体験学習法の中でも多くの要素においてバランスの取れたものであるという特徴について改めて詳しく取り上げた。言うまでもなく、今回でフルコ先生の基調講演の全てを収めたというわけではない。今回はこれまでも述べてきた理論的観点を別の切り口からも詳述し、基調講演において紹介されたスライドも用いながら、現場での活動を組み込んだ学習プログラムへの多角的な見方ができるように工夫をしたつもりである。連載名の「PBLの風と土」という名称から、多少離れた論考として受けとめる読者もいるかもしれないが、次号と次々号までを1つのセットとして捉えて各々の実践を見つめ直す足がかり、また今号までも

含めた10回分の連載を読み解き直す手がかりがもたらされればと願っている。

ただし、本連載は対人援助学マガジンに掲載させていただいている点を鑑み、図3に表す「地域貢献・市民参加の水準」の整理を紹介して、今回の稿を閉じることにしたい。これはサービス・ラーニングも含めて、他者に向き合う活動において、主体と対象の関係との関係を、4つの前置詞で区別して構造的・階層的に示したものである。原初的に、他者に向き合う上では、「To」の水準から始まるが、現場の改善のために何らかの使命感や責任感を携えた場合「For」の水準となるものの、それでは互恵的な関係には至らないため、先ほどの図2で言えば、交流的な関係としては「in」の水準、変容的な関係としては「with」の水準に至るように互恵性を高めていくことが重要となる、と捉えられる。この整理は、こうした議論は教育実践の議論において現場のニーズへの対応をどこまで図るかを考える際に参考となると共に、実践的研究において「陳腐な有用性」（渥美，2009，p.55）が論点に挙げられるような場合、例えばメリットやデメリットといった相対的な価値判断に基づく意思決定の妥当性で議論が錯綜することがないようにするために参考になるのではなかろうか。

ちなみに、フルコ先生は図3のスライドの説明にあたり「デフィシットアプローチ（deficit approach）」という言葉を用いられた。これは文字通り、足りないものを補うという姿勢で向き合うことを指し、その対義語は「ポジティブアプローチ（positive approach）」である。とかく、地域の課題に向き合って何らかの解決を図ろう、というとき、このデフィシットアプローチが取られる。それは時に問題提起をする側で自己完結することになり、活動と学習のあいだでの往還も、また大学と地域のあいだでの互恵性も低いものとなってしまう。ちょうど、俣病資料館の館長などを勤めた吉本（2008）

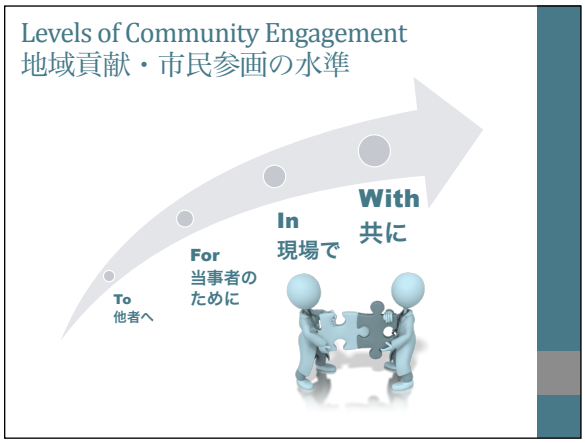

図3：基調講演スライドより（9枚目、訳は筆者）

が、地域の宝物を探す活動を小学生らと始めたことが地元学の構築にあたり、「ないものねだりからあるものさがし」という言葉が根ざしたように、外部者によって×を○にしようとするのではなく、外と内の交流を通して両者の違いを前提にしながら○を◎へと価値を高めていくポジティブな実践が、結果として共通認識として×と捉えざるを得ないものも放っておくことなく、担い手と現場の双方に価値の変容をもたらすことになるだろう。

次回は、フルコ先生の基調講演の後半で触れられた、各種研究成果から学生へのインパクトと、リレートークの前半における立命館大学におけるサービス・ラーニングの実践的研究についてのプレゼンテーション内容を紹介する。ちなみに学生へのインパクトに関する研究でも、先ほどの「デフィシットアプローチ」の観点が関連することを、前もって触れておくことにしたい。更に踏みこんで触れておくならば、サービス・ラーニングでは、学生のポジティブな要素がより引き出される、という具合である。直接的にはサービス・ラーニング、あるいは地域参加型の問題解決活動を組み込んだ教育実践に取り組んでいない読者もまた、学生の学びと成長を扱った実践的研究から、他者との関係性の織り成し方について見つめ直す機会と視角を得ていただければ幸いである。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

渥美公秀．2009．コミュニティの非日常から日常へのダイナミックス．上町台地コミュニティ・デザイン研究会(編)，地域を活かすつながりのデザイン：大阪・上町台地の現場から．(pp.34-55)．創元社

Furco, A. 1996. Service-learning: a balanced approach to experiential education. in Taylor, Barbara. and Corporation for National Service (eds.), Expanding Boundaries: Serving and Learning. Corporation for National Service. (pp.2-6).

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. (2009). Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.

Jacoby, B. 1996. Service-Learning in Today's Higher Education. In Jacoby, B. et al. (Eds.), Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices. Jossey-Bass. (pp.3-25). (山田一隆訳.（2007）. こんにちの高等教育におけるサービスラーニング. 『龍谷大学経済学論集』, 47(1, 2), 43-61).

河井亨・溝上慎一. 2016. 日本の大学教育における「体験の言語化」の意義. 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(編), 体験の言語化（pp.24-60). 成文堂.

興梠寛. 1999. 共生社会へのアカデミズムの新たな冒険. 大学と学生 409, 6-11.

佐々木正道. 1999. サービスラーニング～アメリカの大学（院）生のボランティア活動. 『ボランティア白書1999』編集委員会(編), ボランティア白書1999 (pp.227-234). 日本青年奉仕協会.

佐々木正道. 2001. アメリカ：サービスラーニングへの取り組み. 内外学生センター(編), 大学とボランティア：スタッフのためのガイドブック (pp. 58-67). 内外学生センター.

Sigmon, R. L. (1994). Serving to learn, learning to serve: Linking service with learning. Washington, DC: Council of the Independent Colleges.

溝上慎一. 2014. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂.

吉本哲郎. 2008. 地元学をはじめよう. 岩波書店

【注】

[1]前号では「ファーコ」とカタカナで表記したものの、来日後の打合せの席で確認したところ、「イタリア系なので、カタカナ表記ではフルコあるいはフルーコが近い」とのことであった。そして、Google翻訳と実際の発話との比較を重ねる中で、「フルコ」が妥当であると判断した。そのため、当日の配布資料は「フルコ」に統一することとした。

[2] 2017年2月4日の様子は立命館大学のホームページ http://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=600 でも詳報された。

[3]キャンパスコンパクトはブラウン大学、ジョージタウン大学、スタンフォード大学といった、名門と呼ばれる大学の学長と大学改革に取り組んできた各州の教育委員長（the president of the Education Commission of the States）らが呼びかけて発足した。その存在と機能は、日本でサービス・ラーニングが高等教育政策として取り上げられた当初から着目されてきた。例えば、佐々木（1999, 2001）や興梠（1999）を参照されたい。ホームページ（https://compact.org）によれば、現在は1,000を越える大学・短期大学が加盟し、市民性教育と地域開発を通した民主主義の構築（build democracy through civic education and community development）にあたっている。

[4] 日本の状況と米国の状況の対比は、2019年7月27日のフルコ先生の基調講演の後に行われたトークセッションにおいて、立命館大学サービスラーニングセンター研究アドバイザーの他、日本教育研究イノベーションセンター（JCERI）特任研究員も務める、立教大学経営学部リーダーシップ研究所リサーチアシスタントの木村充氏の発表「サービスラーニングの効果検証とアクションリサーチ」でも指摘された。具体的には、1998年に出版が初めて確認された後に微増が続き、最大値となる2016年・2017年でも年間で60を越えていない。また、サービス・ラーニングに直接関連する書籍としては、2008年の「サービス・ラーニング研究」を端緒に、数冊を数えるのみ、という具合である。ちなみに、筆者によりCiNii Articles（https://ci.nii.ac.jp）で「サービス・ラーニング」を検索した結果は567件で、Google Scholar（https://scholar.google.com）で検索したところ「service-learning」では約82,800件となるのに対し、「サービス・ラーニング」では約16,300である（2019年8月31日現在）。

[5] ローマ字で記された文面が読み上げられた。ちなみに当初案では参加者に対して呼びかけるフレーズは入れられてなかった。しかし、以前からのフルコ先生とのやりとりと、7月25日に関西国際空港に到着して以来の振る舞いを思い、筆者から織り込むことを提案し、盛り込まれることになった。なお、その際の着想は、2011年10月19日にニューヨークで映画『ステキな金縛り』のプレミア上映がなされた際、三谷幸喜監督が用いた英語でのジョークから着想したものである。そして筆者も、JICAを通じて2012年10月5日に立命館大学に訪れたインドネシアからの防災研修の冒頭で、インドネシア語での挨拶を行うにあたり、この手を用いた経験があった。

[6] 筆者の聴き取りでは、「we see the results of not having young people be involved in our political system」と語られた。

[7] 筆者の聴き取りでは、「if we are to incorporate high-quality service-learning into our educational systems we must ensure that our partnerships with community members are ethical collaborative and reciprocal.」と語られた。

[8] 筆者の聴き取りでは「Service-learning was the only one that was built intentionally that incorporates all seven of those pillars on a consistent basis.」と語られた。